

Title	古地図に潜む世界観：室賀信夫と室賀コレクション
Author(s)	後藤, 慶太
Citation	紅萌：京都大学広報誌 (2005), 8: 21-22
Issue Date	2005-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/12001
Right	
Type	Journal Article
Textversion	author

古地図に潜む世界観 室賀信夫と室賀コレクション

後藤慶太（京都大学附属図書館）

邪馬台国大和説

個人的な感慨から筆を起すことをお許してください。

一九九八（平成一〇）年秋、京都大学附属図書館は、古地図及び地理学文献コレクション（室賀コレクション）の古地図を取り上げ、「日本の西方・日本の北方—古地図が示す世界認識—」＊１と題する公開展示会を開催しました。この展示会ワーキンググループの一員に任じられた私は作業に携わりながら、人の縁というものの不思議さをつくづくと感じていました。

その理由はこういうことです。まず一つ目。室賀コレクションの旧蔵者、^{むろ が のぶ お}室賀信夫という名前には聞き覚えがありました。初めてその名前を知ったのは学生の頃、邪馬台国の研究史を繙いている時でした。邪馬台国はどこにあったのかということについては古くより論争になっていて未だ決着を見ていません。文献史学を中心に戦わされてきた邪馬台国論争に地理学の立場から新たな光を照射したのが室賀博士でした。博士は、一四〇二（明の^{けん}建文四）年に朝鮮で作られた「^{ぶん}混一疆理歴代国都之図」（^{こんいつきょうりれきだいこくと の ず}龍谷大学図書館所蔵）という地図に日本列島が九州を北に九〇度回転して描かれていることを出発点として、中国における日本の地理像を時代を遡って考察し、「中國の東南海上に南に転倒した形態をとって描かれた日本こそ、魏晉の時代の中國人の日本についての地理的觀念を、そのまま可視的に表現したもの」であり、「魏志の描く日本像をこのやうに想定することは、おのづから邪馬臺國大和説を支持することにならう」（表記は原文通り）と述べました＊２。説の当否はともかく、当年の私は、歴史の研究には多面的なアプローチが可能で、かつ必要なのだということをおの論文に教えられた気がしました。博士が長い研究活動の中で収集したコレクションが附属図書館に架蔵され、その展示会に関わることになろうとは驚きであると同時に、うれしいことでもありました。

そして二つ目。^{きん だ あきひろ}金田章裕文学研究科教授（現・理事）には、この展示会の展示品の選定・配置、解説の作成等にご尽力いただきました。やはり学生の頃、非常勤講師として私の母校に出講しておられた先生の「人文地理学」を受講したことがあります。その時はまさか将来お仕事をご一緒させていただく日が来ようとは想像だにできませんでした。

地理学教室きっての俊才

室賀博士は、一九〇七（明治四〇）年東京府に生まれ、一九八二（昭和五七）年に七四歳で亡くなりました。一九三三（昭和八）年に京都帝国大学文学部史学科を卒業後、一九三八（昭和一三）年に文学部講師、続いて一九四三（昭和一八）年には文学部助教授に就任しましたが、終戦後、地理学教室の小牧実繁教授が職を辞すると、師に殉じて一九四六（昭和二一）年に辞職しています。その後は一九六七（昭和四二）年に東海大学教授に就任していますが、基本的には野にあって地理学史の研究に専念しました。「京都大学地理学教室卒業生きっての俊才」*3と讃えられ、一九六一（昭和三六）年には京都大学から文学博士の学位を授与されました。また、優れた古地図研究に贈られるイマゴ・ムンディー賞*4も受賞しています。その一方、学生時代から病床につくこともしばしばで、野外調査や見学旅行に出かけることもままならず、論著は必ずしも多いとは言えませんが、優れた洞察力に富む論考を残しています。古地図を扱う重要な視点の一つは、世界観、あるいは空間の認識を読み解くということです。博士が今なお高く評価されるのは、仏教系世界図の研究を通じて、古地図に潜む世界観を読み解くことに早くから取り組んでいたことが大きな理由です。

貴重な古地図コレクション

室賀コレクションは、一九九六（平成八）年に文部省（当時）から大型コレクションの予算措置を受け、附属図書館に受け入れたものです。古地図五一点、和本一九九点、洋書二八五点、その他二点、計九九七点で構成されています。これとは別に、論文抜刷、原稿、研究ノート、書簡類等といった個人資料も多数あり、こちらは松田清^{まつだ きよし}人間・環境学研究科教授のご尽力により整理された上、大学文書館へ寄贈されています*5。室賀コレクションのうち図書類はほとんど地下書庫に配架され貸出も可能です。一方、古地図類はほとんどが準貴重書庫に収められ事前に関覧手続きが必要になっています。今後これらの資料はおおいに研究され、古地図に潜む世界観が新たに見いだされていくことでしょう。最後にコレクションの中から二点だけご紹介して稿を結びたいと思います。

円通「須弥山儀図」（一八一三） 仏教では、世界は須弥山^{しゅみせん}という巨大な山を中心に広がっていると考えられていました。本図はその世界を具象化した須弥山儀を描いた図です。中央に須弥山が描かれ、その周囲を海と山が交互に取り囲んでいる様子がわかります。須弥山の東西南北にはそれぞれ島が描かれており、南方（図の須弥山の右下）の南瞻部洲^{なんせんぶしゅう}が人間の住む世界とされています。天台宗の僧円通^{えんつう}（一七五四～一八三四）は、西洋の

天文学が広まることにより仏教の権威が落ちることを恐れ、仏教的世界観を目に見える形で表した須弥山儀を考案しました。

「南瞻部洲之図」(一六九八年頃) この図は室賀コレクションの中でも最もよく知られたものの一つです。上述したように南瞻部洲とは人間の居住世界のことで、その南瞻部洲を、基本的に北広南狭の形で描いた図こそが仏教系世界図です。天竺(インド)を中心に、東北の隅には震旦(中国)、さらにその東方海上の図端近くには日本が描かれています。作製者は未詳ですが、久修園院中興の祖宗寛(一六三九～一七二〇)との推測もあるようです。

※「須弥山儀図」は附属図書館セクション(常設展示)※6で九月一日からお目見えする予定です。ぜひご来観ください。

- * 1 <http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/muroga/zuroku.html>
- * 2 室賀信夫「魏志倭人傳に描かれた日本の地理像―地圖學史的考察」『神道学』一〇号、一九五六年
- * 3 室賀信夫『古地図抄：日本の地図の歩み』(東海大学出版会、一九八三年)に載せる織田武雄による「あとがき」
- * 4 地図学史に関する唯一の国際的で学際的な学術雑誌 *Imago Mundi* において、その分野に最も重要な貢献のあった論文に贈られる賞(隔年)。受賞対象論文は、海野一隆との共著'The Buddhist World Map in Japan and its Contact with European Maps' *Imago Mundi* Vol.16, 1962
- * 5 松田清「室賀信夫氏個人資料の寄贈」『京都大学大学文書館だより』第八号、二〇〇五年
- * 6 <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/kikou/josetsu/index.html>

キャプション

円通「須弥山儀図」(1813)

木版。62×176cm

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/muroga/bukkyo.html#5-3>

「南瞻部洲之図」(c. 1698)

手書・筆彩。161×192cm

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/muroga/bukkyo.html#5-4>

略歴

後藤慶太（京都大学附属図書館）

ごとう けいた

1988 年 同志社大学文学部卒業

1991 年 同志社大学文学研究科博士課程前期修了

1994 年 京都大学附属図書館情報管理課

1995 年 附属図書館情報サービス課

1997 年 附属図書館情報管理課

1999 年 附属図書館情報サービス課

2003 年 奈良女子大学附属図書館

2005 年 京都大学附属図書館情報管理課